

自主シンポジウム 3

子どもの発達と環境にかかわる保育を考える(3)

—「身近な自然にかかわる保育」によって育つ力を確認し、継続的・組織的な実践の練り上げのための方策を探る—

企画者：田尻由美子（精華女子短期大学）
司会者：後藤 範子（国際学院埼玉短期大学）

指定討論者：無藤 隆（お茶の水女子大学）

話題提供者：
五十嵐市郎（宇都宮大学教育学部附属幼稚園）
藤井 修（たかつかさ保育園）
山田 辰美（富士常葉大学）

企画趣旨（討論の意図と課題）：

子どもを取り巻く環境が激変している現代において、よりよい発達のための環境や保育内容環境を中心にした「環境とかかわる保育」のあり方が十分検討されなければならない。とりわけ自然は多様で変化し、生死や成長などの命の様を見せ、動きや五感を通じた刺激を数多く体験できるなどの特性から、心身の発達や生きる力をはじめ、自然が好きで大切に思う態度や心情などの「環境教育の芽生え」がよりよく育つことが考えられる。保育所や幼稚園では、園内や周りの自然環境を生かし、また、自然を作り出すことが大切である。さらに、保育者自身の感性を磨き、自然と幼児をつなぐ保育指導力への期待も大きい。しかしながら、社会的背景から変容しつつある保育現場では、身近に自然がない、「自然に親しむ保育」が十分取り組まれていない現実があり、さらには保育実践の研究的な練り上げが希薄であるなどの検討課題が多い。

自主シンポジウム（1）（2）において、園内自然環境を工夫し作り出した事例、あるいは近隣の自然環境を最大限に生かした保育の事例をもとに自然に親しむ保育を考えた。また、環境教育的視点をもった自然とかかわる保育とは、あるいは、保育者の役割、保育者や研究者の連携などについて考えた。今回は、特に自然とかかわる保育によって幼児に育つ力を今一度再確認することで、その重要性を世に問う一助としたい。また、研究的視点での実践研究と理論の結合、あるいは保育者や研究者がともに継続的・組織的な実践の練り上げをしていく方策を探る契機としたい。

討論の柱：

- （1）都心部の園庭など限られた自然環境であっても、豊かな自然の復元を可能にする方策とは
- （2）地域の自然環境を最大限に生かしかわって遊ぶ保育実践とは
- （3）生きる力や科学する心、自然を大切に思う環境教育の芽生えなど、自然と十分かわることで育つ幼児の力を考える

（4）研究的視点での理論と実践の統合、継続的・組織的な実践の練り上げの方策を探る

話題提供：

地域の自然環境を生かした保育実践と育つ力

五十嵐市郎（宇都宮大学教育学部附属幼稚園）

当園は宇都宮のほぼ中心部に位置している。しかし、郊外には多く自然を残し、徒歩 20 分の所には約 1 0.5ha の敷地面積をもつ県中央公園（都市公園）があり園外保育の場として日常的に活用している。そこでは、地域の人々（主として高齢者等）との交流（例えば草花遊びや木の実遊びなど手ほどきしてくれる様々な人々との出会いなど）がありそうした草木などやその遊び方を保育の場に持ち帰り自分たちの遊びに生かすことができている。また、こうした園外保育の実施は保護者にも少なからぬ影響を与え、休日を利用し家族で自然とかかわる楽しみ、幼児がその日採取した自然物を保育に持ち込むという循環を生んでいる。園内だけでなく園外そして家庭を巻き込んだ自然とかかわるは、幼児が自然と触れ合う機会を多くするだけでなく、「おもしろい」「きれい」「何で？どうして？」などという感情をも付加する。そうした思いが育っていくので教師が誘わなくとも自分たちで園内の自然環境へかかわっていくようになり、探索し、体験し、教師さえ驚くような発見をしていくようになる。

そうした経験を積み重ねていくことは幼児に本物へのあくなき追求心を育てることになった。例えば手についたばい菌を模式的に書き手洗いの指導をしたときなど絵ではなく本物が見たいと教師に訴えてきて電子顕微鏡の写真を見せたことがあった。そこから顕微鏡をのぞきたいという欲求が生まれ、大学から顕微鏡と理科教育の先生にお越しいただき約 2 時間にわたり様々な園内外の微生物動植物を観察する経験を得ることができた。

私はこうした保育経験を踏まえ、幼児が自分の周りの自然に、思う様、十分に、何度でもかかわっていく（いける）ことが、今を含めた将来への科学する心を

育て、また、自然を大切に思い「護る・育てる・慈しむ」といった環境教育の芽生えにつながっていくと思うのである。

生活の質を向上させる園芸活動

たかつかさ保育園 園長 藤井 修
子どもは「育てられる対象」としての関係に置かれるが、彼らと保育園生活を共にしていると、彼ら「自らが育とうとする力」の大きさに気づかされる。保育時間が長時間化する現在、保育施設的环境は、子どもがこの主体性を発揮しやすい環境をより工夫すべきであろう。その条件の一つとして、最も身近な園庭や保育室で植物を栽培することをあげたい。保育者が子どもと共に実行することが有効である。現代の生活の営みには、消費型の行為やマニュアル化された行為が随所に見られるが、植物を育てる営みはその対極にある生産型、アナログ型の思考を活性化する行為として価値を認めたい。筆者は、平成15年度「バケツ稲」栽培に5歳児の子どもたちと半年取り組み、従来から取り組んできた園芸・栽培活動の意義をより強く感じる事ができた。発芽から育苗、バケツ田の水管理、出穂、収穫、脱穀、炊飯までの一連の長い取り組みの随所に子どもの好奇心の持続がみられ、子ども自身が稲はもちろん周辺の生きているものとの感情交流を伴う試行錯誤の取り組みとなった。同時にその期間の気象・土地柄に依存する必然性を帯び、保育者中心の単調な保育施設内に保護者は元より地域の専門家・業者を招き入れ、多様な人間関係も生まれた。植物自身の成長する能力に子どもの小さな力が作用し、食べ物として結実する園芸活動は「手ごたえ」や「自分の出番」を理解しやすい保育内容である。要は、保育士・施設管理者の栽培に対する積極的な学びと施設環境の整備にかかっている。保育士養成の内容に園芸の基礎を組み込んで習得させることの意義は大きい。

自然遊びとビオトープの活用

山田辰美（富士常葉大学）

今日の子どもの日常生活を考えると、自然と深く関わらせたいと思う。子ども達は、コンピューターゲームやアニメなどの仮想現実の世界に入り込んで、現実の手応えとは全く異なる強い刺激に慣れ親しんでいるようだ。彼らの本能が活き活きた本物の体験を求めていると感じる。五感で感知する確かな手応えのある自然界との交感こそが、彼らの貧困になった感性や萎えた意欲を蘇生させると考える。

保育にもっと自然を取り込むべきである。季節感のある木の実や草花などを使った遊びは、自然に対して

眼差しを向け、一体感を味わう第一歩となる。公園や街路でさへも、大いなる自然への入り口となる。野生の本能である彼らの好奇心は、自然界の様々な色や形、手触りなどに強い興味を示す。そこで大切なことは、自然物との触れ合いを楽しむ術を知っている者がいるかということである。どの地方にもその風土を活かした自然遊びが存在し、子どもから子どもへと伝えられていた。地縁の異年齢集団には、自然への興味を高め、眉を上げる感覚（好奇心）を呼び覚まし、みんなを遊びに夢中にさせる力があつた。地域に子どもの群が発生しない今日、保育者や親がガキ大将の役割を演じなければならないかも知れない。

自然的な空間に改善する園庭のビオトープ化は、日常的に自然と触れ合うことが出来る環境作りの試みである。安全や衛生の観念が過剰であったり、既存のガーデニング的なものであつたりして、残念ながら優れた事例は少ない。ビオトープの考え方がもっと保育の世界に普及すれば、生命に満ちた世界との一体感を通して、太い根を張った植物のように子どもの精神は安定し、澆刺と遅く生きる力をつけてくれるはずである。

指定討論： 自然への関心の芽生えを育てる

自然への関心の芽生えを育てる

無藤 隆（お茶の水女子大学）

ごくささやかな庭しかなくても、そこに自然への関わりはあり得る。そこに雑草を生やすことが出来る。木を一本植えれば、そして実がなり、落ち葉が散るようになれば、季節の彩りは豊かになる。プランターだってよい。そしてそこには日が差し、風が吹き渡る。

幼児期に自然の最も基本となる要素に出会うべきである。草と木、花と実、虫や小動物、あるいは土であり、風であり、光であり、水と氷であり、雨と雪であり、また、暑さと寒さである。そこに会うとは、身体ごとぶつかることであり、心からの驚きと感動があることである。見入り、浸り込み、手にし、触り、叩き、味わう。時間と季節の変化の中の姿の変容に気がつき、びっくりする。

そのものに時間を掛けて、丁寧に関わり、その微細な特徴を見て取れるように導く。それが可能となる面白い活動を工夫して、子どもを誘い込む。心に染み込んだ者を形に表すように、表現の活動を導入する。

科学的な考え方も自然を大切にす気持ちも行動も、すべてはまず、自然に関わり、その多様でありつつ、そのものがいつも同じ姿を示すという驚嘆の念から始まるのである。